哲學研究　第八十號　第七卷　第十一冊

アッハの近業、概念形成の實驗的研究（承前）

大脇義一

七

上述の如き研究方法によつて觀察した意味形成の種々なる過程をアッハは三種に分類する。原始的意味附與 die autochthone Bedeutungsverleihung 命名判斷による意味附與、並に潛在的意味態度 die latente signifikativé Einstellung による意味附與是である。中でも原始的意味形成に就いての彼が見解は特に觀察の精緻と獨異の分析を示してゐる點に於て見逃すことの出來ない文字である。

原始的意味形成に固有なことは是まで決して名前として用ひられてゐなかつた言語的表徵が突然ある意味を獲得するに至ることである。そして其が實驗者と觀

察者との了解の手段として役立ち又方法としてこの目的規定を滿足せしむるのである。原始的意味形成の過程を可能ならしめむが爲には、豫め一定の事實的な心的條件を立することが必要である。後に意味の保持者として現はるべき前語とそれに屬する後語との間に強き聯合が結ばれなければならない。かくて實驗の手續きによつて後語とそれに相當する前語とに自ら注意が向けられたならば、そこで始めて注意作用が意味形成の作用を產み出すのである。そしてその結果實驗者と觀察者との間に了解が成り立つのであるが、こゝに注意すべきことは觀察者の解答の當否を斷定するものは一見そう思はれる樣に實驗者の側にのみあるのではない。言ひ換へれは實驗者が觀察者の對象表象を自分のに同化せしむるのではなくて寧ろ對象の側に歸着するのである。卽ちこの實驗の結果二人の間に出來上つた對象表象が一致し同一性を持つに至るのは矢張、對象それ自身の間に存する特質に基くことが最も多いのである。なるほど或る個人にあつては視覺表象が他の表象を支配してゐる爲に、かゝる人によつてはその對象の視覺的屬性が最も多く注意され、それが表象內容の基礎をなしてゐるであらう。また聽覺的素質の人は聽覺的印象が、筋肉運動的、言語運動的などの人は夫々の印象がその表象內容を代表してゐるであら

う。かくの如く具象的素質に相違あるが爲に對象表象は各個人によつてかなり著く外觀を異にしてゐることは事實である。然し乍らこゝに一度對象の內面的關係が識野 Bewusstseinsfeld の中心に持ち來されなければならなくなると斯の如き對象表象の具象的差違は殆ど看過されむとする。夫々の人が多樣に形作つた對象表象は歸一して全ての人に同一な事實的の對象表象に到達する。そして具象的素質の差違が背景に推しやられるのに代つて別種の現出卽ち非具象的現出が追々前景に突き出て來る。それに就てアッハは或は探索法により或は了解法によつて見出した結果を枚擧してゐる。そして彼は對象表象の一致が非具象的な所謂「覺」Bewusstheit の狀態に於て考へられた場合に最も簡單に到達せられることを說く、なほ彼は此の具象的要素の沒落又は敗退によつて生ずる對象の屬性、例へば重さ、大さなどに就いての非具象的な知 das unanschauliche Wissen のことを理念的對象 ideelle Objekt (哲學上の所謂理念とは勿論別物であるが適當の譯語を見出さないから暫く理念と譯してをく)と彼は呼んで居るのであつて、例へば了解法に於て前語と其に屬する後語なる對象表象の間に意味が成り立つのは記號と理念的對象との融合又は統一に基くのである。この融合の統一 Fusionseinheit に於て又それに由つて前語と其に屬する凡ての後語と

が統一され、それが後語の名前になる。即ち名前は理念的對象との融合の統一をなした結果、その限りに於てこの對象表象 Objektvorstellung の實物 Gegenstand の代表者となるのである。tam といふ語は子音で始まる三綴文字なる對象表象の代表者となるのである。かくて tam といふ記號は一つの意味 signifikative Bedeutung を帶びることになり、それに是れは同じ條件の下に於ける他の人々にも妥當するからして、これらの人はこの言語的表徴を用ふることに由つて相互に理解することが出來るであらう。

こゝに於て普通考へられてゐる樣に言葉それ自身を對象の表徴だといふことは當らないのであつてアッハに言はせると、寧ろこの對象の意味狀態を表現しようといふ表徴的機能の方を見逃してはならないのである。理念的對象に融合されてこそ語(記號)はこの表徴的機能に把握され得たのである。かように名前は理念的對象に統合され一全體となることに由つてそれは又同時に此の對象の所有する特徴又は屬性となるに至るのである。そして從來の他の屬性と全く同じ性質を持ち來るのである。例へば Gazun といふ語が融合の結果、大きく重い物體の名前となつたとすれば今や「Gazun である」"gazun-sein" といふことは重いとか大きいとかいふことゝ全

く同様に此の物體の一屬性なのである。この名前が了解乃至說明の手段として役立つ限りそれは最も重要な特性なのである。その他の屬性は經驗の進歩と共に對象に重要ならざるものとして捨象される可能性があるが、此の名前ばかりは一般に了解の手段として役立つといふ目的規定が正當に存立する限り對象に不可缺なるものとして殘されるのである。

然し乍ら了解法の結果によると概念は原始的意味附與過程だけでは未だ完全に形成されるに至らないことがある。例へば tam といふ語は始めは一語命題の意を有するだけであつて概念を意味しない。卽ち「tam に組合さるべき後語を加へよ。」といふ意味であつて「子音で始まる三綴文字」そのものをば指してゐないのである。換言すれば意志的であつて概念的ではない。そこで是を概念的にするにはどうするか。といふと、其には tam をば了解の手段として種々の他の關係の中へ度々使用するのである。そうすると「tam に組合さるべき後語、卽ち子音で始まる三綴文字」といふ部分は了解手段として、普通的機能としていつ迄も殘存して使用されるが「を加へよ」といふ部分は變動的機能として漸次に後退し脫逸するに至るであらう。かくて tam が、反復使用さるればさるゝ程前者はより明確に固定して後者を驅逐し、遂に

凡てを占有して概念を形成するのである。特に「これは tam ぢやない。」とか「tam が三つもこゝにある。」とかいふ風に是が主語として又は説明語 Prädikat として用ひらるゝ場合にそうである。

さて次に第二の意味附與乃至概念の形成が言語的に形作られた判斷、卽ち命名判斷 Benennungsurteil によりて起る場合は一般科學に最も多く見出す處であるが吾々の日常生活にかなり屢々現はれるのは第三の意味の潛伏的態度による概念形成である。言語によらずして唯の暗示的態度によつて無意識的に形成される場合である。そして之が心理的條件としてアッハは先に述べたように未だ名けられない事物に名前を與へむとする傾向などを擧げ、更に其に次で、單なる記號と事物との結合だけでは意味關係とはならないこと、相卽 identify することは出來るが意味とはならない。記號が事物の索引又は表示とはなるであらうが意味 signifikative Bedeutung とはならないことを説いてゐる。

餘りに簡に失するかも知れないが私はアッハの紹介をこれ位に停めたい。そして最後に少しばかり慢言を附け加へることによつてこの稿を閉ぢようと思ふ。

八

アッハは今述べたように概念の形成過程を三種に分つたのであるが行動主義 Behaviorism を以て知らるゝワットソンは思考作用一般をやはり三種に分つてゐる。その第一は2に2を加ふれば4に等しとか9の平方根は3であるとか、その他詩句引用句などの如く語の排列は一定不變であつて唯だ發聲習慣を反復するに過ぎない場合である。そこには新しい環境に面して新しい運動を試みるといふことは全く見られないのであるからワットソンは是を最も簡單な單一刺激に對する反應型に比してゐる。

J. B. Watson; Is thinking merely the action of language mechanisms? The British Journal of Psychology. Vol. XI. 1921.

第二の形式は問題を解くことそれ自身は必ずしも新しいことではないが然し其は常には殆ど遭遇する機會が無いのでやはり試行的の言語行動 trial verbal behaviour を必要とする場合である。例へば半ば忘れた詩の句を思ひ出す場合とか、ある數學の公式を現在の特殊の問題に應用する場合である。卽ち部分過程は全て經驗した

ことはあるが然しそれらをた易く自由自在に驅使することは出來ない。

第三の思考形式は前の二形式の極端に發展されたものであつて、解決すべき問題も全く新しいものであり遭遇する環境亦た異常な場合である。ワットソンは是を突然地位と財産とを失つて僅か數時間の中に如何なる生活樣式をとるべきかを考ふるべく餘儀なくされた場合に比してゐる。

かくして行動主義者は思考がその形式の何れなるにせよ、凡て身體的過程に外ならないこと、換言すればそれは一般にあらゆる顯在的並に潛在的言語活動及び之に代り得べき行動に過ぎないことを說くのであるが其は兎に角としてワットソンの此の分類法は彼の立場としては當然な歸結であり明確な分類であることは疑ふべくもない。

然し若し吾々が彼とは多少見地を異にして刺激とそれに對する反應運動のみの立場を離れて之を見るとすれば彼の所謂第一の思考形式、3の平方は9であるといつたような何等新し味の無い行動に於てすらやはりそこに單なる言語運動を放れて何か心的な意識的な働きを見出すであらう。今、吾々が此の orthodox の立場を採るとすればそれに基く思考現象の分類法は自ら又ワットソンとは異なるものがあ

るであらう。

更に若し吾々にして複雜な又は複雜と思はるゝ現象を凡て感覺表象に歸することだけを以て心理的分析の至れるものとは考へず、又感覺表象の複合を以て說明することのみを心理的說明とは考へないとすれば如何なる分類法、否一般に如何なる研究態度に出づるべきであらうか。アッハ等が曾て主張したように思惟過程を精神現象の中のある一箇の要素のみを以て特徵づけむとすることは然し乍ら、不合理ではないかも知れぬが無理のあることは爭はれない。彼が今度の研究にそうした、言はゞ現象的方面の分析を棄てゝ機能的な發生的な半面に着眼したことはこの體に於て甚だ興味ある出來事である。物々しい計時機などを用ひず、子供や頭蓋銃傷者——それは戰禍の慘を物語るものゝ一つであるが、そうした者を觀察者の中に採り入れ、從て內省などのことをそれ程八釜しく言はず又言ふことも出來ず發問 Ansfrage も止めにしてひたすら觀察者の經驗の自然なる發表にすがつてゐる。

曾てキュルペにその端を發した思考に於ける抽象作用の研究はアッハも擧げてゐる通り是までその數に乏しくないのであるが私は是が最近の文獻としてイングリッシュの研究結果を見ることが出來た。

O. Külpe; Versuche über Abstraktion. 1904. Berichte über den I Kongress für experimentelle Psychologie.

H. B. English; An experimental study of certain initial phases of the process of abstraction. American Journal of Psychology. July, 1922.

彼はこのアッハは近業を未だ知らないらしくその研究方法はアーベリングに學べる所が最も多い。然し彼の着眼點の面白く思はれることはその題目の示してゐるように抽象過程の中の特に端緒的な樣相 initial phases を細く吟味した點にある。彼の最後の結論に從へば抽象作用は表象の分析に始るか又は表象の概念的同化に始るかの何れかである。言はゞ前者は部分的同化であり後者は全體的同化である。この同化の部分的なるか將た全體的なるかゞ決せられるのは意識の中に適當な心的範疇が存在するか否かに依る。若しそれが存在するならば全體的同化が起り、存しなければ部分的同化卽ち分析が始るのであるがたとへそれが存在しても心的態度が分析的であれば部分的同化が行はれる。要するに抽象作用は分析に赴くか概念化に走るかの何れかにその端を發するのであるが分析又は同化が起るには又夫夫手掛りcnesがある。その中、概念化の作用卽ち一定の既成範疇に同化する作用の

手掛りとなるものはイングリッシュによれば三群ばかりある。

第一群の手掛りといふのは觀察者の表象に對する注意が與へられた感覺材料を變形し轉化せしむる場合で、例へば視覺として與へられた幾らかの刺激が一つの味覺として抽象されるような場合である。第二群のは與へられた材料の中のある一部を高調することによつて起る同化であり、第三群は一定の心的範疇 mental category が既存してゐたのみならず與へられた刺激が既に此の範疇に同化されてゐたことを豫想せしむる場合である。この中に又二つの場合があつてその第一は個體又は個物としての刺激の名前は禁止され、それが想ひ出される前に既に一般名辭が意識に現はれて來る時である。例へば林檎、蜜柑、柿、葡萄などを書き並べた圖を刺激として提示した場合にその個々の名前が意識されるに先だつて「菓物」といふ一般名辭の方が早く想ひ浮びそれに由つて全體を同化するような場合である。第二の場合は種名辭(卽ち一つの言葉)が直接に現はれて來て現在の刺激と心的範疇概念)との媒介をなす時である。(English; Ibid. P. 348)

概念的同化作用は果してイングリッシュの言ふようにかくの如き緒を辿つて一歩一歩より完全な抽象に到達するものとすればその機能は言ふ迄もなく一つの內面的

意志活動であると考へられる。概念形成の行程は意志活動の行程である。ワットソンの所謂行動の行程であると言ひ得るかどうかは問題であるが意志作用の一形式たることは確かである。單なる聯想的發展ではなくして意識的企圖であらう。それは或は下意識的に近づくことも多からうし、目的表象は具象的の明度を欠き衝動動機は外に現はるゝこと少き感情に基くでもあらう。然し乍ら概念化、抽象化への活動なる限り必ずやそは一つの心的なる意圖に據る働きであらうと思はれる。

——（一一・一〇・一三稿）——